

## 「地域医療と家庭医」について考える

佐 藤 芳 治

我町・上川町は、国内で最大規模を

誇る大雪山国立公園と共に歩み、農業と観光を産業の柱として、今、行政と住民が一体となり協働のまちづくりを進めている。歴史的には林業の町として栄え、昭和三十五年当時の一万五千人を超えた人口は、今や三分の一に激減している状況にある。その象徴であつた木材関連の工場も二十二を数えたが、今やそれも皆無である。位置的には北海道の中央に位置し、医療機関が飽和状態といわれている旭川市との距離が、近年の高規格幹線道路の整備により車で三十分から四十分という比較的恵まれた環境にある。

さて、町の紹介はこの程度にして本

題に入ることとした。

この町の内科・外科系の医療機関は、近年まで開業医もいくつか存在し地域の医療を支えてきたが、高齢化とともに残つていた一つも閉院となり、唯一、町立病院がその使命を担うこととなつた。ちなみに歯科医は三医院が頑張つて地域を支えている。

町立病院は九十一の病床（一般五十四床、療養型三十七床）をもち、この間、大学の医局からの支援協力と他からの派遣により、内科、外科、週一回の整形外科を維持してきたところであり、常勤の医師は内科一名、外科一名非常勤若干名の構成となつていて、その経営状況は、過疎化などによる患者

の減少、医療制度改革に伴う診療報酬の減額改定などにより極めて厳しい現状にある。病床利用率も二十%台と極端に低く、一般会計からの繰り出しも三億円を超えている。

そのような状況下、一昨年、外科医が退職不在のなか、院長からの突然の通告を受けることとなつた。外科医の後任を早急に配置されなければ、自分と他の一医師も数ヶ月をもつてやめさせてしまう。救急指定病院としての看板を、精神的苦痛に耐えられないでの、即刻はずしてほしい。また、ただちに診療所に移行すべきである——等々の内容であつた。

二〇〇四年に導入された新たな臨床研修制度は、医師の都市への偏在化と大学自身の医師不足を招くこととなり、医局から地方への派遣がもはや絶望的な状況下、医療事業財団等への要請により補うこととなるが、それでも常勤医の確保は容易なことではない。厳しい経営難とともに、医師の確保は非常に不安定な綱渡りの状態が長期にわたつて続いてきたところである。さらに私にとつて衝撃的な言葉を院

こととなつた。



長から聞かされることとなる。「こんな所に好んで来る医者は一人もいない。自分はつながりのあつた前の大学教授から頼まれたから来てやつているのだ」と。

他の町では、こんな所は人間の住むところではない、と言い放つて辞めた医師もいると聞く。その地域に暮らす住民に対しこれほど愚弄した表現はないだろう。

私は昨年四月、町長に就任すると同時に、最大の行政課題である病院の安定維持を図ることがその使命であると考えていたところであり、このような医者に地域医療は担えるわけがないし、この町の医療を託すわけにはいかないという強い思いで改革の道を突き進む

府内では三次にわたり職員プロジェクトで検討を重ね、議会においても特別委員会により並行して議論を進め、一つの方向性を出すこととなつたが、さらにそれを地域住民にとって有益なものにするためにはこれしかないと確信を持たせてくれたのが「北海道家庭医学センター」との出会いであつた。

同センターは、これから地域医療、特に農山漁村における一次医療の中心的担い手として、チーム医療による「家庭医」を標榜する医療法人である。

厚労省はこの間の医師抑制策を見直し、学生枠を増やして医者の増員策に転じるようであるが、上からの一定の規制による誘導やシステムでは根本的な地域医療の問題解決になるはずがない。问题是、自らが地域医療を志そ

うという若い医師をどのように育てるか、そのような環境をいかにつくり上げていくかが重要なのである。我町と診療提携を結ぶこととなつた北海道家庭医療学センターはまさに、そんな地域医療の今後を見通した日本の家庭医養成のパイオニアであるといえる。

家庭医とは、患者一人ひとりの個性、家庭生活環境を把握し、誰でもいつでも専門外といわずに診てくれ、どんな健康問題でも相談に応じ、呼ばれれば往診もする。さらに診療面では、内科・小児科を中心に、その他一般的な病気に対応できる最新の医療知識と技術を持ち、専門医を必要とする場合は適切に判断をして速やかに紹介する。

旭川医大生の中にも、これから地域医療の担い手としての家庭医のこと学び、実践の場にも出向きながら、研究活動を進めているグループが現在あると聞き、大変頼もしく思つてゐる。

我町としては、これから地域医療を守るために、微力ながらこの家庭医学センターの発展のために支援していくことを考えており、是が非でもこの診療提携をモデルケースとして成功させたいと思つてゐる。

住民から「何がどう変わるんだ」と聞かれたときには、私は「あなたたちの診療にあたる医者の志が違うのです」と答えている。